（第３種郵便物認可）

読売 俳壇

高野ムツオ 選

濁流の岸に白鷺病癒ゆ
向日市　山田　正則

【評】梅雨時の雨後の川の動と河岸に佇む白鷺の静。まるで一幅の絵だが、大病をやっと克服した人の心のありようとそのまま重なる。「病癒ゆ」の下五に万感がこもる。

羊蹄を握り潰して立ち上がる
西宮市　塩川　直樹

【評】何があったか、どんな心境だったか、それは不明。しかし、羊蹄のざらざらした手触りの実感が確か。あとは意を決し歩き出すのみ。

早苗饗や母がゐたなら踊り出す
匝瑳市　椎名　貴寿

【評】陽気な一家の陽気な働きもの の母。酒量も父に負けてなかったに違いない。大家族が揃って楽しんだ早苗饗の主役もやはり母だった。

初夏や牛舎を洗ひ牛洗ふ
袖ケ浦市　浜野まさる

牛鳴いて遠足の児らよろこばせ
竹原市　岡元　稔元

雨上がるまでの一服藺草刈
志木市　谷村　康志

鈴蘭の一つ一つに意志の白
平塚市　冬野　旅人

どの席も天下国家やビヤホール
越谷市　小林ゆきお

万物に声をかけたき夏の朝
深谷市　村田　利雄

風が触れ雲触れ泰山木の花
香川県　福家　市子

正木ゆう子 選

海芋咲くみんな帰って来るやうに
大網白里市　滝沢ゆき子

【評】海芋はどれも「帰ってくるように」咲く、と解釈したい。他の花には代えられない海芋の存在感だろう。太い茎、純白の大きな花。わが家でも毎年同じ場所に帰ってくる。

緑さす吾が免疫よ強くあれ
入間市　豊泉　繁雄

【評】気をつけられるところは気をつけて、あとは免疫頼み。せめて外へ出て、日光を浴び、萌え出る草を踏み、新緑を仰ごう。それが一番。

時の日やひたすら波の音を聴き
神奈川県　中島やさか

【評】日本で初めて時計によって人々に時を知らせた日、時の記念日は六月十日。しかし作者は時間を気にせずに、いつまでも波の音を聴く。

麦秋や北関東はうどん好き
熊谷市　馬場　国夫

藁足して煙にむせぶ初鰹
三田市　溝田　利幸

牛乳に大地の匂ひ草茂る
つくば市　横田　和己

その川の珪藻の味鮎の宿
神戸市　西　和代

刈りしあと出でて萱草咲きにけり
東京都　松永　京子

そら豆の莢割るごとくギプス切る
焼津市　山下　邦子

田植日は代掻き牛も御馳走に
福山市　平井　和子

小澤　實 選

男性の日傘言わるも私は無理
札幌市　佐藤　学

【評】夏、高温かつ日射しの強い日が続く。日傘も女性だけのものでなく、男性もさすようになってきた。しかし、自分には無理だと告白している。まさに現代の日傘の句である。

老犬につきまとう蚊を打ちにけり
行田市　吉田　春代

【評】蚊を打つ、という句は多いが、ほぼ自分を刺しに来た蚊である。ここは蚊から逃げることができない老犬に来た蚊を打ったのだ。

蘆青々と捨舟の中にまで
町田市　鈴木　朗

【評】蘆原のなかに捨てさられた舟の底を突き破って、蘆が生え出ているわけだ。自然のたくましさを青蘆の姿で鮮やかに示している。

棟梁の打つ釘の音響く夏
豊橋市　佐原弘一郎

髪洗ふISSの窓の影
霧島市　白坂　昭典

梅雨入りやセメント齧るダンゴ虫
調布市　長沢　寸拙

曳きずれる獲物や蟻の躓きつつ
柏　市　佐藤　敏文

葉桜やチョコチップ入りメロンパン
日立市　菊池二三夫

籐椅子を寄せて耳打ちする二人
神戸市　岸下　庄二

父の日や和解はせぬが礼尽くす
筑紫野市　二宮　正博

津川絵理子 選

はちみつを絞るイベント夏きざす
会津若松市　安藤　和繁

【評】はちみつを絞る時期は、晩春から夏らしい。珍しいイベントなので、参加希望者も多いのでは。初めての体験で楽しいだろう。さらっとした詠みぶりに季語が効いている。

残る歯にほど良き硬さ豆の飯
加古川市　東田　強

【評】老いて歯が抜け、食べるものに気を遣う。残る歯を大事にして、でも柔らかすぎるものでもなく。「硬さ」に生きる矜持がある。

小満や昆布に締めたる連子鯛
印西市　保良龍三郎

【評】連子鯛は真鯛より小さく身が柔らかいので、昆布締めが美味しそう。草木が満ちる小満の頃の一光景として、ユニークな視点がある。

一枝の白薔薇中年の躊躇
高砂市　宮田　悦子

同窓会みんな縮んで五月晴
行橋市　野田　文子

薫風や戦いすんで愛子逝く
茅ヶ崎市　日高　朝代

袋掛会話のようなひとり言
神奈川県　石原美枝子

生涯の友は蛙よ田植笠
伊賀市　福沢　義男

夏夕べまどろむ猫の老い深し
大分市　大島　芳子

蛙みな鳴きやみ沼の闇深し
龍ヶ崎市　小宮　光司